

学位請求論文審査報告要旨

2023年3月8日

申請者 王雪竹
論文題目 「ノダ」構文に対応・応対する中国語の表現
—書き言葉の調査を中心に—

論文審査委員 庵 功雄
太田陽子
王 世和

1. 本論文の内容と構成

「のだ」は日本語学習者にとって習得が難しい形式である。「のだ」に関する先行研究は数多いが、その大部分は日本語母語話者の内省に基づくもので、非日本語母語話者が「のだ」を使い分けるといった観点からの考察はいまだ不十分である。

本論文は、こうした問題意識に立った筆者が、日本語が原文で中国語訳がある書籍および中国語が原文で日本語訳がある書籍をコーパスとし、「のだ」とそれと対応する中国語の形式、および、「のだ」と1対1対応はしないものの「のだ」の意味を表していると考えられる中国語の表現（後者の対応は本論文で「応対」と称されている）を丁寧に取り上げ、非母語話者の観点から考察した「のだ」の捉え方を明らかにしようとしたものである。

本論文の構成は次の通りである。

序章

1. 考察対象と目的
2. 考察方法

第1章 先行研究および本論文の立場

1. 先行研究
 - 1.1 日本語の「のだ」の意味・機能に関する研究
 - 1.2 「のだ」と関連する中国語の研究
2. 先行研究の問題点と本論文の立場
 - 2.1 本論文の考え方と考察対象
 - 2.2 応対する形式も考察対象にする理由・意義
3. 本論文における「のだ」の各分類に対する認識
 - 3.1 本論文における各意味の定義
 - 3.2 意味の重なりについて
4. 本論文の構成

第2章 日本語と中国語における「関連付け」の言語形式の使用差比較

1. 考察理由
2. 考察についての説明

3. 日本語と中国語における「理由・解釈」の言語形式の比較
 - 3.1 日本語と中国語の「理由・解釈」の言語形式の使用条件
 - 3.2 日本語と中国語における「理由・解釈」の言語形式の使用差
 4. 日本語と中国語における「言い換え」の言語形式の比較
 - 4.1 日本語と中国語の「言い換え」の言語形式の使用条件
 - 4.2 日本語と中国語における「言い換え」の言語形式の使用差
 5. 日本語と中国語における「発見・再認識」の言語形式の比較
 - 5.1 日本語と中国語の「発見・再認識」の言語形式の使用条件
 - 5.2 日本語と中国語における「発見・再認識」の言語形式の使用差
 6. 日本語と中国語における「前置き・先触れ」の言語形式に関して
 7. 日本語と中国語における「命令・認識強要」の言語形式の比較
 - 7.1 日本語と中国語の「命令・認識強要」の言語形式の使用条件
 - 7.2 日本語と中国語における「命令・認識強要」の言語形式の使用差
 8. 本章のまとめ
- 第3章 「理由・解釈」の「のだ」に対応・応対する中国語
1. 考察作品における「のだ」の概況と中国語との対応状況
 2. 対応形式の詳細と考察
 - 2.1 「のだ」の中国語対応形式の内訳
 - 2.2 原因・理由系
 - 2.3 「のため」系
 - 2.4 順接系
 - 2.5 “是” / “是…的”系
 - 2.6 推測系
 - 2.7 記号系
 - 2.8 その他
 3. 本章のまとめと結論
- 第4章 「言い換え」の「のだ」に対応・応対する中国語
1. 考察作品における「のだ」の概況と中国語との対応状況
 2. 対応形式の詳細
 - 2.1 「のだ」の中国語対応形式の内訳
 - 2.2 言い換え系
 - 2.3 記号系
 - 2.4 その他
 3. 本章のまとめ
- 第5章 「発見・再認識」の「のだ」に対応・応対する中国語
1. 考察作品における「のだ」の概況と中国語との対応状況
 2. 対応形式の詳細
 - 2.1 「のだ」の中国語対応形式の内訳
 - 2.2 実例から見えた対応形式についての検討
 3. 本章のまとめ

第6章 「前置き・先触れ」の「のだ」に対応する中国語

1. 考察作品における「のだ」の概況と中国語との対応状況
2. 対応形式の詳細
 - 2.1 「のだ」の中国語対応形式の内訳
 - 2.2 「理由・解釈」「言い換え」の「のだ」から「前置き・先触れ」の対訳形式を考察する
 - 2.3 「順接」系と「前置き・先触れ」の対応性の検討
 - 2.4 推測系と「前置き・先触れ」の対応性の検討
3. 本章のまとめ

第7章 「命令・認識強要」の「のだ」に対応する中国語

1. 考察作品における「のだ」の概況と中国語との対応状況
2. 対応形式の詳細
 - 2.1 「のだ」の中国語対応形式の内訳
 - 2.2 モダリティ助詞・副詞系と「命令・認識強要」の「のだ」の対応妥当性の検討
 - 2.3 “是/“是…的”系と「命令・認識強要」の「のだ」の対応妥当性の検討
 - 2.4 “就”系と「命令・認識強要」の「のだ」の対応妥当性の検討
 - 2.5 記号系と「命令・認識強要」の「のだ」の対応妥当性の検討
 - 2.6 その他と「命令・認識強要」の「のだ」の対応妥当性の検討
3. 本章のまとめ

第8章 「のだ」と“是…的”の対応性について

1. 本章の内容と目的
2. 「のだ」表現の成立
 - 2.1 「のだ」を「の」を中心的に見る
 - 2.2 「だ」の形成と性質
3. “是…的”構文の成立の考察
 - 3.1 “是…的”に関する先行研究
 - 3.2 “是…的”構文の考察
 - 3.3 “是…的”構文の“是”
4. まとめ

第9章 「「スコープの「のだ」」について

1. 「スコープの「のだ」」の独立性
2. 「～のではない、～のだ」の対応形式
3. 実質的に「のか」の「のだ」の対応形式
4. 本章のまとめ

第10章 本論文のまとめと今後の課題

1. 本論文のまとめ
 - 1.1 各機能の「のだ」の対応形式ありかの状況
 - 1.2 各機能の「のだ」の対応形式一覧
2. 今後の課題

2. 本論文の概要

本論文は10章からなる。

第1章では、「のだ」に関する日本語の先行研究、対照研究および本論文の「のだ」に対する認識、立場が述べられる。先行研究を踏まえ、①「のだ」の本質的な機能は既知の情報との関連づけを示すことである、②「のだ」は中国語としてあまり言語化されない、③「のだ」と対応するものと考えられることが多い“是…的”は実際は対応しない場合が多い、④“是…的”や“是”以外の「のだ」の対応形式にはまだ明らかにされていないことが多いことが指摘される。本論文では「のだ」の意味機能を基本的に庵ほか(2001)の「理由・解釈」「言い換え」「発見」「再認識」「先触れ」「前置き」「命令・認識強要」に従い、そのうち「理由・解釈」「言い換え」を「のだ」の一次的意味、「発見・再認識」「先触れ・前置き」「命令・認識強要」を二次的意味と見なすこと、「のだ」が一次的意味と二次的意味を合わせ持つ場合は二次的意味を優先して分析することが述べられる。

第2章では、「のだ」の意味機能を「理由・解釈」「言い換え」「発見・再認識」「先触れ・前置き」「命令・認識強要」に分けて日本語と中国語の対応を考察する前提として、日本語と中国語においてこれらの意味がどのように捉えられるか、使用頻度、言語化される頻度に差があるのかが考察される。考察の結果、「理由・解釈」「言い換え」については日中両言語の使用頻度に差があり日本語の方が多く使われ、「発見・再認識」は両言語の使用頻度に差があり中国語の方が多く使われること、「前置き・先触れ」は考察する作品の中から特定できなかつたため考察できなかつたこと、「命令・認識強要」は使用頻度に差がないことが明らかになった。

第3章では、「理由・解釈」の「のだ」に対応・応対する中国語の表現が考察される。考察の結果、①「理由・解釈」の「のだ」は中国語において有形の形式で訳されるのは約1割である、②訳されない理由は、第2章の考察と合わせて考えると、「理由・解釈」の論理関係は中国語において有形の言語形式を用いないで表現することが多いためである、③訳される1割の中で、対訳の種類が最も多いのは原因・理由を表す“因为”“所以”のような「原因・理由」系の表現であることが述べられる。つまり、④「のだ」が「理由・解釈」として働く際、中国語に訳されても同じく典型的な「理由・解釈」の表現になる、⑤対応・応対表現の種類として、“因为”“所以”といった原因・理由系の表現の他に、目的を解説する「のため」系、原因・状況を解説する“是/是…的”系、解説機能のある記号系がある、⑥その他に、理由・解釈の機能が核心でないものの、事態の時間的・空間的な継起を示すことによって推論の証拠を提示し、事柄が生じた理由・結果を示す順接系、推測系の表現も対応・応対形式として使われていることが明らかになった。

第4章では、「言い換え」の「のだ」に対応・応対する中国語の形式が考察される。考察の結果、「言い換え」という用法の多義性に起因し、その機能を果たす「のだ」に対応する中国語の形式にも様々なバリエーションが存在することが明らかになった。今回の考察からは、「言い換え」の「のだ」の対応形式として、「推論関係」「解説・証明関係」「定義的關係」に属する形式が観察された。「推論関係」を表す形式には「:」「—」などの「記号」、「可以看出(このことから分かるように)」「因此(そのため)」「所以(そのため、だから)」などの形式があり、「解説・証明関係」を表す形式には「:」「—」があり、「定義的關係」を表す形式には“就是(つまり)」「也就是说(つまり)」「意

思是（これは～を意味する）” “总之（とにかく、要するに）” が観察された。

第5章では、「発見・再認識」の「のだ」に対応・応対する中国語の表現が考察される。考察の結果、「発見・再認識」の「のだ」は「理由・解釈」の「のだ」と同種で、意味的には因果関係を表すものであるが、因果関係の上に「その場で初めて気づいた／その場で初めて思い出した」という条件が加わったものであることが述べられ、この意味を含む中国語の対応形式に“原来（…啊）（～だったのか）” “竟然（まさか～だったのか）” “看来（～から見ると～だったのだ）” があることが述べられる。

第6章では、「前置き・先触れ」の「のだ」に対応・応対する中国語の表現が考察される。「前置き・先触れ」の「のだ」は実例が少ないため、本章の考察分析は実例を参照しつつ内省も加えて分析が行われている。考察の結果、実例から得られた「前置き・先触れ」の「のだ」の対応形式には“是……的” 構文の否定形の“不是……的” が見られた。「前置き・先触れ」の「のだ」の本質は、本来の「のだ」の関連づけの順番を逆にするすることで聞き手・読み手の興味を喚起することにあると考えられるため、こうした形式は基本的に「理由・解釈」の「のだ」に含まれることになる。以上の条件を満たす形式として推測の意味を表す“我认为（～だと思う）” と“据说（～だと言われている）” が観察された。

第7章では、「命令・認識強要」の「のだ」に対応・応対する中国語の表現が考察される。「命令・認識強要」は文章において多く使用されるものではないため、他の用法より用例数は少ないものの、モダリティ助詞系の“居然（まさか～だ）” “真（本当に～なのだ）” “啊（～のだ）” “绝对（絶対～）” “一定（絶対、必ず～）” “真（本当に～なのだ）” “是/“是…的” 系の“是（～だ）” “就” 系の“就是（～でないならそれまでだ、こそ、するやいなや）” 記号の“！” などの形式が観察された。

第8章では、前6章の考察に基づき、先行研究で対応関係が指摘されてきた「のだ」と“是…的” が実際はそれほど対応していない理由が考察されている。考察の結果、①「のだ」の「の」は準体句の消失とその性質を保つために要求された形式上の成分であり、準体助詞の「の」は代名詞の「の」に由来し用言を名詞化するものである、②「のだ」の「だ」は「連体なり」の意味を継承しており、「の」と「だ」の併用は日本語の形態上の束縛が大きな要因になっている、③「のだ」の成立初期の用法は形態上の束縛に大きく左右され、「のだ」の起源である準体句は、ヒト、モノ、コトガラのいずれも表せるため「のだ」の前接成分は制限がなく広い意味を表せる、④“是…的” は「のだ」と異なり形態的な束縛から発達したものではない、⑤“是…的” の“的” は代名詞から発達し前文脈との照応を示すものである、⑥“是…的” の“是” は論理性や指示の明示性を示すための成分である、⑦そのため“是…的” 構文全体の意味が単一であり「説明」という意味合いが強いなどの理由で、「のだ」と“是…的” が意味的に対応する部分が少ないことが論じられている。

第9章では、「スコープの「のだ」」に関する議論が展開される。まず、「スコープの「のだ」」は「ムードの「のだ」」と完全に区別されうるものではないため、対応形式を考察する観点から考えると、「のだ」をスコープとムードにあえて分ける必要はないことが指摘される。その一方で、「スコープの「のだ」」の中には「～のではなく、～のだ」と、実質的に「のか」を意味する「のだ」という統語的にスコープの特徴がはっきりしている「のだ」があり、それぞれに対応する中国語の表現として、「～ではなく、～のだ」については、指示範囲を明示する“是”、「～ではなく、～のだ」の直訳“不是～，而

是～”が見られた一方、実質的に「のか」を意味する「のだ」については、「～のではなく、～のだ」よりムード性が高い場合が多いため、スコープの機能だけを表す対応形式は観察されなかったことが述べられる。

第10章では、本論文のまとめ、今後の課題などが述べられている。

3. 本論文の成果と問題点

本研究の成果は次の通りである。

評価すべき第1点は、日本語学／対照言語学はもちろん日本語教育の観点からも重要なテーマに真摯に取り組み、日中両言語の対応／応対のあり様を通して、「のだ」の示す意味領域の全体像をかなりの程度明らかにしたことである。特に、「中国語母語話者」の観点からこの表現をとらえ直す試みは重要である。

第2点は、計30冊のビジネスと自己啓発類の原作と訳本の書籍を調査し、実証的研究手法を徹底的に行ったことである。事例分析を踏まえて出した結論は実用性があり、「のだ」の各意味機能に対応する中国語の言語形式と比率は、母語重視という、日本語教育のための文法研究の関連からも、日本語教育現場に有益な内容として評価できる。

第3点は、意味機能ごとに豊富な用例を丹念に対照していくと同時に、単に対応する形式間の考察にとどまることをよしとせず、形式間の分析に先立ち、そもそも日中両言語でその意味領域を言語化する割合を検証した第2章や、日中の対応形式と考えられる「のだ」と“是…的”を歴史的な成り立ちの経緯からとらえ直した第8章などの議論を通して、日中両言語で手堅く、かつ、広がりを持った検討に成功していることである。

このように優れた点を数多く持つ本論文にも以下のような問題点が存在する。

問題点の第一は、「ゼロ形式」の考察が不十分である点である。中国語は日本語とは異なり、文（や節）の接続において接続形式（日本語学で言う「接続詞」や「接続助詞」に相当する言語形式）を必ずしも必要としない。そうだとすれば、日本語で「のだ」が使われている場合にその対応表現が「ゼロ形式」になることも十分考えられる。本論文でもそうした点に配慮して、「のだ」が中国語の形式と1対1対応する「対応」だけでなく、そうした形式上の対応関係が見られない「応対」も考察対象とするとされている。そうであればなおさら、「ゼロ形式」に関する踏み込んだ分析があれば、本論文の考察がより深まったものと思われる。

第二の問題点は、第一の点とも関連するが、「のだ」が「訳されない／形に現れない」（「ゼロ形式」）の場合と「訳されるもの」（「対応」）との違いが何か十分に明らかにされていない点である。本論文の調査により、「のだ」の約9割は「訳されない／形に現れない」ことが明らかになった。そうであれば、この9割がどのようなものであるか、また、訳される1割はなぜ言語化される必要があったのか、といった点が明確に示されなければ、「中国語の発想から考える」「中国語母語話者にわかりやすい記述」を目指すという本論文の主旨は十全に果たせないのではないだろうか。

第三の問題点は、本論文で（先行研究をもとに）措定されている「のだ」の5つの意味機能の重み付けに関するものである。本論文ではこれらの5つを同列に扱っているが、学習者にとって「理解しやすい」記述を考える上では、上位概念としての一次的な意味（「理

由・解釈」と「言い換え」)を優先するのが望ましいなど、意味機能の重みづけとともに提示されていれば、なお有益な記述となりえたのではないか。

以上のような問題点を有するものの、これらはいずれも本論文が達成した成果を損なうものではない。また、王氏自身もこれらの問題点を自覚しており、今後の研究においてこれらの問題点が克服されることが期待される。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、王雪竹氏に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 庵 功雄
太田陽子
王 世和

2023年2月20日、学位請求論文提出者、王雪竹氏の論文「「ノダ」構文に対応・応対する中国語の表現—書き言葉の調査を中心に—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、王氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、王雪竹氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。